

# かみのやま 歴史・文化財さんぽ

第48号 (令和5年5月)

あゆむ「久しぶりに出かけるね。」

ミドリ「そう、今日は、小穴の大フジよ。」

文じい「小穴地区の南方の山に向かう、大山沢という沢づたいにあるフジの木じゃ。」

ミドリ「フジね！薄紫色のきれいな花よね。」

ふみお「そう、フジ棚と言って、棚につるをはわせて育てていることが多いよね。」

ミドリ「大フジということは、そうとう大きなフジ棚なのかしら？」

文じい「いやいや、自生のフジの木は、近くの樹木にからみついて伸びていく。」

あゆむ「ふうん。からみつかれた木は大変だね。」

文じい「ふむ。ホストと言って、支柱役、つまり支える役目をしている。」

文じい「ほら、見えてきた。」

ミドリ「あっ、本当に大きいわ！」

大  
フ  
ジ

大  
山  
沢  
(  
小  
穴  
)  
の

お  
お  
や  
ま  
さ  
わ

こ  
あ  
な



ミドリ「大きさはどれくらいかしら？」  
文じい「測定は凸凹があって難しいが、目通り幹  
周りは 5.46m。高さは約29.5mという。」  
あゆむ「中をのぞいてみよう。」  
ふみお「おお、3つの祠がある。」  
ミドリ「フジの幹がねじれながら上に伸びている。」  
あゆむ「そして、やっぱりとなりの木にからみつ  
いている。」



文じい「2本の根元から、さらに4本の幹に分か  
れ、近くのコナラやスギに寄りかかって  
上に伸びておる。」  
ふみお「見上げると、すごくたくましいな。」  
あゆむ「根元はすごく太いよね。」  
文じい「そう、5.6mあるらしい。庄内の金峰山の  
フジも大きいが、それよりも大きくて、山  
形県では、一番じゃろうのう。」  
ミドリ「これだけ大きいフジにからまれたホスト  
の木も大変ね。」  
ふみお「スギは枯れかかっているようだね。」  
文じい「祠は山の神で、スギはその御神木じゃ。」  
ミドリ「祈りの森なのね。」

あゆむ「何年ぐらいたったのかな？」  
文じい「樹齢は、御神木のスギから推定して450  
年以上といわれておる。」  
ふみお「すごいなあ。この地区の自然の歴史を考  
えるのに大事な樹木だよな。」  
ミドリ「フジはマメ科の植物だったわね。」  
あゆむ「へえ、それじゃあ豆ができるんだ。」  
ふみお「15cmぐらいの細長い莢の中に平らで丸い  
実が入っている。乾くと裂け  
て、中のその種を飛ばす。」  
あゆむ「へえ、おもしろいね。」  
ふみお「マメは、みんなそうだね。」  
ミドリ「花がとにかくきれいよね。  
薄紫の蝶の羽が重なるよう  
に並んで咲いている。」



文じい「ところが、最近、イノシシの害なども多  
くなったことから、県や市の力も借りて、  
周りをきれいにし、土も補充して、支柱  
を立てて、柵もめぐらした。地域の方々の  
熱意と努力があったからじゃな。」  
ふみお「なるほど。そのことも考えて、周りの根  
が張っている所を踏み固めないように、  
離れて鑑賞しなければならぬね。」  
ミドリ「周りの山々のフジもきれいね！」